

今昔物語 第13話

桃の節句と雛人形

三月三日は、座敷に雛人形を飾り、桃の小枝を生けるなどして、訪れたお客を「ちそうや白酒でもてなします」。

この日は桃の節句（雛祭り）という五節句の一つで、五月五日の端午の節句とは対照的に、女の子の誕生・成長を祝う、女の子にとって楽しい一日です。

このような形の雛祭りは、江戸時代から行われるようになりました。

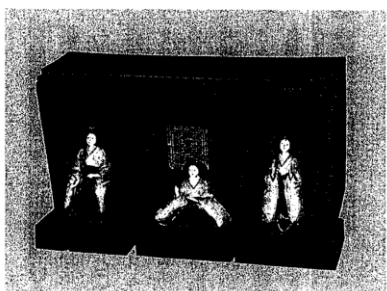
わが国に古代からあつた俗信仰で「自分の罪を人形（ひとがた）に託し、人形を肌身にすりつけた息を吹きかけ、これを水辺に乗て流す」という風習が中国から渡来した行事と結び付いたのがこの祭りの原形のようなのです。

平安時代に幼女がかわいらしい人形で遊ぶことを「ひひな遊び」といい、宮廷の遊びとなり、江戸

時代になって、宮廷の階層をまねた雛壇を造り、飾り立てるようになりました。

やがて庶民にも広がり、戦前・戦後の復興期まで大東では、限られた家にしか雛人形はなかつたそうです。

写真の雛人形は、市内の旧家の蔵にあつたものですが、箱表書きから、戦前の東京の雛市で、娘のために買い求めた物のようです。



今昔物語 第14話

寺小屋から学校へ

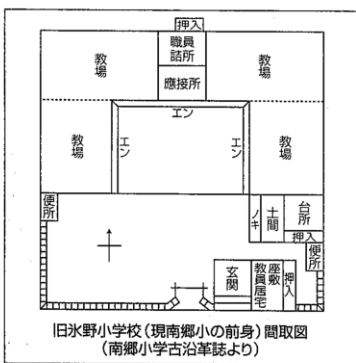
木綿のカスリカタテジマを着て、かばんの代わりに木綿のふろしきの中に、石板・石筆・読本を腰に巻いてカチャカチャと音をたてて、田んぼのあぜ道を通学していく子どもたち。

明治5年8月、太政官布告をもって学制が発布されたところから明治時代の子どもの通学風景です。

大東市域では、学制発布直後、現在の会所橋東側寝屋川沿いに深野郷学校が、最初に設立されました。

このころ設立されたほかの学校も神社や寺院または会所を仮校舎としての、文字通り寺小屋からの出発でした。

その後、新築された校舎の間取図を見ても、木造・平屋で3〜5教室しかありませんでした。



窓も出入口も紙障子、長机に長腰掛で二人並んで勉強しました。腰掛には背もたれがないので後ろへひっくりかえることもあつたそうです。

就学率も特に女子は低く、全国平均就学率が90%を超えたのは明治38年になってからです。

4月の小学校の入学に、1年生が真新しいランドセルや学習机をそろえてもらう今日とは、かなり様子が違っていました。